

7 図画工作科

加藤潔己・阿比留時彦

1. 研究テーマのとらえ方

(1) 図工科における豊かな感性について

感性とは、一般的には「刺激に対する感応のしやすさ」、「驚きの反応」など感覚の反応として受動的なものと捉えられている。片岡徳雄氏によれば、感性とは「価値あるものに気づく感覚」であり、何に対して気づき、何を感じるのかという点で「選択」と「働きかけ」を伴うものであり、けっして単なる受身の感覚ではない。さらに、人間及び人間を取り巻くあらゆる事象に対して、「気づき」、「感じ」たものから「考え」、(想像し)、「追求する」(表現する)活動を促し、その子どもの生き方までを含めた人間形成と自己実現をめざすものとしてとらえている。

図工科の目標「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な創造活動の基礎的な能力を育てるとともに表現の喜びをあげ、豊かな情操を養う。」(小学校学習指導要領)にあるように、特に図工科においては「情操を養う」ことが教科の目標にある。「情操」は「価値あるものに向かう感情」または「そのような感情を起こす準備状態」であると考えるとき、「情操」は、「感性」に促されて、より主体的に思考や意志や創造の働きと関わり、自己表現をめざす感情ととらえることができる。このような「自己実現をめざす感情、心情」を図画工作科ではさらに「創造的心情」ととらえる。つまり「創造的心情をもった人間」を育成することが図画工作科の主たる目標であると考えている。このように、「情操を養うこと」あるいは「創造的心情の育成」の基底に、「感性」を豊かに育むことが位置づくとしてとらえて研究をすすめたい。

(2) 図工科における豊かな感性をそなえた子ども像＝創造的心情をもった人格

- ・いろいろな事物・事象に敏感である。
- ・考え方が多面的で柔軟性があり想像力、創造力が豊かである。
- ・真理を求め、正しいと思うことには強い力(権威・権力)にも立ち向かう。
- ・課題を見つけ出し、その解決に意欲がある。
- ・独自性と個性をもつ。
- ・物事を終始一貫して追い求め、深めようとするねばり強さ(こだわり)がある。
- ・心身を開放し、自分の可能性を追い求めていく。

2. 図工科において豊かな感性を育むために

(1) 授業の在り方

子どもの側に立つ授業

- ・個々の児童の思いや願いから始まる授業(内発的な動機に支えられた意欲の存在)
- ・自分の思いを膨らませ、自分のよさを発揮していける授業
- ・自分の思いを深く追求し、より納得のいくものを具現しようとする授業
- ・ともに高まり合う授業

(2) 教師自身の感性の在り方

- ・題材(教材)への感性
- ・子どもの思いや活動への感性

- ・美的表現に対する感性

3. 本年度研究の視点—— 題材および題材との出会いの場の工夫

子どもたちの経験や興味・関心を考慮した題材および出会いの場の工夫は、主体的な活動を決定づける力をもっている。教師は子どもたちの実態を把握し、子どもたち自身がこれまでの経験をもとに、進んで表現したい自分の思いを見つけ、主題を決めてイメージを抱き、自分のよさを発揮しながら手をはたらかせ、活動を楽しむことができるような題材を工夫することが大切であると考えられる。題材との出会いの場の設定の工夫として以下の支援が考えられる。

- ・驚きを大切にしたり、考えを揺さぶったりする。
- ・五感をはたらかせる場をつくる。
- ・イメージをふくらませる言葉かけをする。
- ・自分の生活の中の夢とかかわらせる。

4. 感性に着目した「気づく」「感じる」「考える」「表現する」という造形活動の在り方と共感し支援する指導の在り方

